

グルー＝ナーナクの実践論

橋 本 泰 元

1. はじめに

本紀要第55号に拙稿「グルー＝ナーナクの思想における『神の自己顕現』の観念」を掲載したが、本稿はグルー＝ナーナクの神観念と不可分の関連をもつ修道論をさらに原典『グルー・グラント・サーヒブ』(GS)に探っていく試みである。

2. 救済論と実践論

「ジャプジー」の第一行目の詩句が、短い二行詩のなか救済論とその回答¹の両方について述べていることをすでに考察してきた。Ōankāra 第44偈²はもう一つの要を得た言説を提示し、初めに問題を提示している。

王も武士もおらず、誰も残っていない、貧者も富者、ファキール（修行僧）も。
自分の番が来れば、誰も耐えられない（残れない）。
道程は困難で険しい、湖も山も越えがたし。
私の体は不徳で衰え死にそう [だが]、徳がなくてどうして [神の] 家に入れようか。
有徳の者たちは徳をもって神に会えるが、私は彼らにどのように愛情をもって会えようか。

この後に、回答が続く。

彼らのように [私は] なれるだろう、心の中でムラーリ（神）を念誦して。
[私の心は] 不徳で満ちているが、徳もまたある。
正師なくして徳は知られず、それまでは [人は] 「ことば」を念想せず。

この回答は二重になっている。すなわち救済は、正師の「ことば」に表明される神の恩

1 Vāra Mānjha, saloku 1, paūrī 19, GS, p.147.

2 rānā rāu na ko rahai raṅgu na tuṅgu phakīru || vārī āpo āpanī koi na bandahi dhīra ||
rāhu burā bhīhāvalā sara ḍūgara asagāha || mai tani avagana jhuri muī viṅu guṇa kiu ghari jāha ||
guṇīā guṇa le prabha mile kiu tina milāū piāri || tina hī jaisī thī rahām japi japi ridai murāri ||
avaguṇī bharapūra hai guṇa bhī vasahī nāli || viṅu satagura guṇa na jāpanī jicarū sabadi na kare bīcāru || (Ōankāra 44, GS, p.936).

寵と、個我の側の不徳の除去という個人の努力、この両方に依拠しているのである。ここで、啓示された「ことば」に対する個人の必要な対応としてナーナクが示した修行論を吟味する必要がある。

修行の目的は神との合一であり、その必要条件は神をすべての生類のなかに、特に人間の心 (mana) のなかに認識することである。その方法は、開示された神の属性を愛情を捧げながら瞑想することである。その付随する結果は、心の浄化と鍛錬であり、生涯を神の教令に完全に同調させていくことである。そして、最終の結果は、神に心を融合——人間の表現を超えた結合状態——させて輪廻転生からの開放である。これは外面的な、あるいは機械的な効力を否定するものである。ナーナクにとって特別の内面的な帰依が救済法なのである。

3. 内面の宗教

カビールの思想は明瞭でない点が多いが、ある一点でカビールは極めて明瞭である。カビールが内面の経験としての宗教を強調したことを誤解する人は、おそらくいないであろう。また出自を誇示し外面的な儀礼を信用していたすべての人たちをカビールが糾弾していたが、その辛辣さは今も効力を失ってはいない。グルー＝ナーナクは、カビールとまったく同じようなけんか早さを示してはいないが、しかし、この形骸化した悪習の糾弾という点において、カビールと同じように堅固であり明瞭である。ナーナクも出自による差別、聖典、儀礼そして苦行が盛んであった環境に生き、カビールや他のサントたちと同様に、それらを真実の宗教とはまったく相容れないものであると弾劾したのである。

〔聖典をただ〕読み続け〔本当の勤めを〕忘れては罰を受ける。

〔そのような者は〕多くの知識があるが、往来（輪廻転生）する。

〔神の〕名号を念誦し〔神を〕畏れて食事をする。

〔そのような〕正師に向く奴僕は〔神に〕融合する。

石を拝み聖地に住む。

〔そのような者は〕さまよい歩き世捨て人となる。

心に汚れがある者が、どうして浄められようか。

真実なるもの（神）に会えば、榮譽を得る³。

バラモンたちはカビールが示したものと比較できる嘲弄を受け入れようとはしないが、わ

3 pari pari bhūlahi coṭā khāhi || bahutu siānapa āvahi jāhi ||
nāmu japai bhaū bhojanu khāi || guramukhi sevaka rahe samāi || 5 ||
pūji silā tīratha bana vāsā || bhramata ḍolata bhae udāsā ||
mani maillai sūcā kiu hoi || sāci mikai pāvai patī soi || (Dhanāsarī Aṣṭa. 2 (5-6), GS. p. 686)

れわれは、バラモンたちの仰々しい見栄に対するナーナクの態度に関心をもたざるを得ない。

聴け、パンディットよ、儀礼を事とする者よ。

幸福を生む儀礼は、兄弟よ、個我の本質を考察することだ。

〔おまえは〕 シャーストラやヴェーダを立てて説くが、兄弟よ〔それは〕 世俗の行為だ。

偽善で汚れは払えない、兄弟よ、〔おまえの〕 内部に汚れと悪意〔があるからだ〕。

こうして蜘蛛は〔自分の罫に〕 陥る、兄弟よ、頭が重く逆さまになって⁴。

金製の台所、金の鍋。

銀で縁取りが〔してある〕、とても長く。

ガンガーの水、ホーマ（献供）の火。

とろける食べ物、牛乳に浸して〔ある〕。

心よ、〔これらは〕 勘定書にけっして入らない（無駄である）。

真実の名号に浸されなければ。

〔人は〕 18〔プラーナ〕を〔書写して〕持つだろう。

4 ヴェーダを暗唱できるだろう。

祭礼には沐浴し、慈善の布施を〔するだろう〕

斎戒、日常勤行を昼夜するだろう。

カーズイー（イスラーム法官）、ムッラー（宗教指導者）、シャイフ（長老）かもしれない。

ヨーガ行者、ジャンガマ（遊行者）、黄褐色の衣を着た者〔かもしれない〕。

家住者は業務に従事する〔かもしれない〕。

〔名号を〕理解できず、みな〔輪廻に〕束縛される⁵。

4 suni panḍita karamā kāri ||
jitu karami sukhu ūpajai bhāi su ātama tatu bīcārī || rahāu ||
sāsatu bedu bakai kharo bhāi karamu karahu saṁsārī ||
pākhaṇḍi mailu na cūkai bhāi antari mailu vikārī ||
ina bidhi dūbī mākurī bhāi ūṇḍī sira kai bhārī || 2 || (Soraṭhi Aṣṭa. 2, GS. p. 635)

5 suine kā caūkā kañcana kuāra || rupe kīā kārā bahuta bisathāru ||
gaṅgā kā udaka karante kī āgi || garuṛā khāṇā dudha siū gāḍī || 1 ||
re mana lekhai kabahu na pāi ||
jāmi na bhūjai sāca nāi || 1 || rahāu ||
dasa aṭha likhe hovasi pāsi || cāre beda mukhāgara pāthi ||
purabī nāvai varanām kī dātī || varata nema kare dina rāti || 2 ||
kājī mulām hovahi sekha || jogī jaṅgama bhagave bhekha ||
ko girahī karamā kī sandhi || binu būjhe sabha kharāsi bandhi || 3 || (Basanta 3, GS. pp. 1168–9)

このようなナーナクの言説の中に、真実の宗教的理解に必要な資格としてカースト（ジャーティ）制を拒絶するサントの特徴を、われわれは容易に見出す。グル＝ナーナクはカーストの位置付けに対する傲慢、カースト差別に起因する「浄・不浄」の観念を叱責し、個人の神への到達においてカーストの位置づけが必要であるとか、あるいは有利であることを示唆するあらゆることを激しく糾弾した。

〔みなの中に神の〕光を認識せよ、ジャーティを訊くな、もはやジャーティはない⁶。

ジャーティも空しく、名声も無駄だ。

すべての生類に一者（神）の陰〔が及んでいる〕。

だれかが自らを善人と呼ぶだろう。

ナーナク〔曰く〕、神が勘定書のなかに入れる者が⁷、それ（善人であること）を知る⁷。

おお親しき者（神）よ、私は高くも低くも真ん中でもない、

ハリ（神）の庇護のもとにあるハリの奴僕〔なり〕⁸。

ナーナクは、不浄とは出自の違いによってあるのではなく、個人の心の状態の中にあると明言している。

悪しき心はドームの女、無情な心は屠殺人の女、

悪口は掃除人の女、偽りの怒りはチャンダーラの女⁹。

〔なぜ台所の〕線が引かれたのか、すでに四〔本の線〕が引かれているのに。

真実を〔自己の〕修練とし、正しい行為を行い、沐浴して名号を念誦せよ。

ナーナク〔曰く〕、今後、罪深き方法を教えない者は、最上〔の人である〕¹⁰。

このようなカースト差別拒否の考え方は、サントたちに共通するものであり、カビールの場合は特に強い。グル＝ナーナクの場合には、実践的な表現となっていると考えられる。この点で、シク教のランガル（laṅgara）は最も注目される側面であり、ランガルは

6 jānahu joti na pūchahu jāṭī āgai jāṭī na he || 1 || rahāu || (Āsā 3 GS. p.349)

7 phakara jāṭī phakaru nāu || sabhanā jā ikā chāu ||

āpahu je ko bhalā kahāe || nānaka tā paru jāpai jā pati lekhai pāe || 1 || (Vāra Sirī Rāgu, saloku 1, paūrī 3, GS. p. 83)

8 ai jī hama utama nīca na madhima hari saraṇāgati hari ke loga || (Gūjarī Asata. 4 (1), GS. p. 504)

9 ドームは火葬業者、チャンダーラはカースト外の民で、ここに表現されている民はいずれもカースト外の不可触民と見なされている。

10 kubudhi dūmanī kudaiā kasaiṇī para nindā cūhaṛī muṭhī krodhi caṇḍāli ||

kārī kaḍhī kiā thīai jān cāre baiṭhīā nāli ||

sacu sañjamu karaṇī kārām nāvaṇu nāu japehi ||

nānaka agai ūtama sei jī pāpām pandi na dehi || (Vāra Sirī Rāgu, saloku 1, paūrī 20, GS. 91)

どのグルドワラーにも附属するコミュニティーの差別を超えた大食堂である。このランガルの制度がカースト差別への意識的な攻撃として発達したことには、ほぼ間違いのないであろう。しかし、この制度が最初に導入されたのは、グルー＝ナーナクによってなのか、あるいは第3代のグルー＝アマルダースによってなのかはまったく不明である。可能性としては後者のほうであろうが、ランガルはナーナクの諸作品のなかに明確に表現された理念を表現していることは疑いの余地はないだろう。この理念は彼の後継者たちによって忠実に継承され、1699年、グルー＝ゴーヴィンド・スインフがカールサーを結成したときに行った灌頂の儀礼のなかで正式に表明されたのであった。

福德をもたらす伝統的な行為の妥当性も、否定されている。

正師を知らない知者の、善行がなんの役に立つ¹¹。

有形相の対象に対する崇拜も嘲笑されている。

ヒンドゥー教徒は〔根本を〕まったく忘れ、誤った道に行く。

ナーラダ仙が教えたように、〔偶像を〕拝んでいる。

〔彼らは〕暗黒のなかの盲で聾。

石を拝んでいる、夢中になって愚か者は。

それが自ら沈んだら、おまえをどうして〔彼岸に〕渡せようか¹²。

女神・男神を拝んで、兄弟よ、何を願うのか、〔神々が〕何を与えてくれるのか。

石〔の像〕を水で洗って、兄弟よ、水に沈んでしまう、それらは¹³。

巡礼の聖地 (tīratha) での沐浴もまったく無効であると否定されている。

沐浴しに聖地に行っても、心に不浄があって身体は盗人。

一つ (外面の汚れ) は沐浴してなくなるが、

もう一つ (内面の穢れ) のほうはもっと増える。

外側を洗った托鉢は、中に毒が詰まっている。

11 gura kau jāni na jānāi kiā tisu caju acāru || (Sirī Rāgu 13, GS. p. 19)

12 hindū mūle bhūle akhuṭī jāmhī ||

nāradi kahiā si puja karāmhī || andhe guṅge andha andhāru ||

pātharu pūjahi mugadha gavāra || ohi jā āpi dūbe tuma kahā tarāṇahāru || 2 || (Vāra Bihāgarā saloku 2, paūrī 20, GS. p. 556)

13 devī deva pūjiai bhāi kiā māgaū kiā dehi || pāhaṇU nīri pakhāitai jala mahi būḍahi tehi || (Sorathī Dutuki 4 (6), GS. p. 637)

善き人は沐浴せずとも善し、盗人は〔沐浴しても〕盗人の中の盗人¹⁴。

聖地に沐浴に行こうか、〔いや真実の〕聖地は〔神の〕名号なり。

聖地はことばの瞑想であり内奥の智慧なり。

正師の智慧が真実の聖地であり、〔そこでは〕十種の祭礼が常に営まれている。

私はハリ（神）の名号を常に求めん、与え給え、主よ、大地の支持者よ¹⁵。

苦行や世俗を捨てて孤独な巡歴の旅に出る、特に出家遊行が無責任で安易な生活を与える偽善的なものとして求められるのであれば、そこには解脱はまったくない。

〔人は〕智慧なく讃歌を歌う。

飢えたムッラー（イスラームの教師）は〔自己の〕家をマスジッド〔にする〕。

稼ぎのない者は耳朶に穴を開ける〔ハタ・ヨーガ行者のように〕。

ファキール（乞食僧）のようになって、

さらに〔自己の〕ジャーティ（出自）をなくす。

グル（ヒンドゥー教の導師）、ピール（イスラームの導師）と呼ばれる者は

物乞いに行く。

骨折って働き食べ、手ずから〔施物〕与える。

ナーナク〔曰く〕その者こそが〔真実の〕道を見極める¹⁶。

この最後の二行詩は、特異な世俗放棄の積極的な側面を示している。苦行は拒否され統制のある現世肯定主義が断言されている。真実への道は、このように、世俗の誘惑に惑わされることなく現世に生きることに存するのである。このことはサントたちの共通項であり、グルー・ナーナクは、これを表現するために慣用的な蓮華の比喩を用いている¹⁷。

Sūhī 8の繰り返しの句は、明らかにナート派の特徴的な「耳の裂けたヨーガ行者」

14 nāvaṇa cale tīrathī mani khoṭai tani cora || iku bhāu lathī nātiā dui bhā caṛāsu hora ||
bāhari dhoti tūmaṛī andari visu nikora || sādḥ bhale aṇanātiā cora si corā cora || 2 || (Vāra Sūhī salpku 2 paūrī 12, GS. p.789)

15 tīrathī nāvaṇa jāu tīrathu nāmu hai || tīrathu sabada bīcāru antari giānu hai ||
gura giānu sādā thānu tīrathu dasa puraba sadā dasāharā || hau nāmu hari kā sadā jācau dehu prabha dharanīdharā ||
(Dhanāsari Chanta 1 (1), GS. p. 687)

この詩節の第3行目後半句の原語は dasāharā であり、その意味は一般的に、ヒンドゥー暦第7月アーシュヴィナ月（西暦9-10月）の自分第10日に祝われる「勝利の第10日」を指し、戦闘女神ドゥルガーの悪魔マヒシャ成敗あるいはラーマ王子の魔王ラーヴァナ成敗を祝う。

16 giāna vihūṇā gāvai gīta || bhukhe mulām ghare masīti ||
makhaṭū hoi kai kaṁna paṛāe || phakaru kare horu jāti gavāe ||
guru pīru sadāe maṅgaṇa jāi ||

ghāli khāi kichu hathahu dei || nānaka rāhu pachānahi sei || 1 || (Vāra Sāraṅga saloku 1, paūrī 22, GS. p. 1245)

17 kāgadu lūṇu rahai ghrita saṅge pānī kamalu rahi || aise bhagata milahi jana nānaka tina jamu kiā karai || (Rāmakaṭī 4, GS. p. 877)

紙、塩にギー（精製バター）が〔塗られて〕いれば、蓮華が泥水に〔汚されない〕ように〔変わらない〕。このような帰依者を得た人に、死神は何ができればか。

(Kānaphaṭa yogī) に向けられているが、この観念を強く表現している。

ヨーガは継ぎはぎの衣でもなく、ヨーガは杖でもなく、
ヨーガは灰を塗ることでもない。

ヨーガは耳環でもなく剃髪でもなく、ヨーガは角笛を吹くことでもない。
〔世俗の〕塵埃のなかで無垢で居れ、このようにヨーガの道を獲得せよ¹⁸。

物事への執着は否定されているのであるが、神の名号を愛する者たちは、こうした執着を避けようと自身を隔離する必要はないのである。

真実なるものを憶念すれば光明（覚り）が現れる。
それによって〔人は〕毒（迷妄）の中でも超然としている。
正師の栄光は、かくの如し。
息子・妻のなかでも帰趨（解脱）を得る¹⁹。

執着への誘惑のただ中で生きつつも、執着からのこの自由は正真の帰依者にとって適切な手本である。苦行者やヨーガ行者は空しく徘徊する。

〔私が〕金の山に洞窟をつくって、あるいは地界の水に〔沈んだら〕。
あるいは大地のなかに〔埋められたら〕、空に〔昇って〕頭が重く逆さになったら。
完全に身体を着物で覆って、〔着物を〕常に洗っていたら。
白・赤・黄・黒の四ヴェーダを大声で叫んだら。
泥と汚物のなかにおいて、悪い考えを持って考えが誤ったら。
私〔という意識は〕なかった、〔今〕ない、〔将来も〕ないだろう、
ことばを思念すれば²⁰。

頑迷に慣行に従うカーズイー、パンディットそしてヨーガ行者は、道を踏み外している。

カーズイーは嘘ついて汚物を食べる。

18 jogu na khinthā jogu na daṅḍai jigu na bhasama caṛātai || jogu na mundī muḍi muḍāiai jogu na siṅhī vāiai ||
aṅjana māhi niraṅjana rahīai jogā jugati iva pātai || 1 || (Sūhī 8, GS. p. 730)

19 saci sumariai hovai paragāsu || tā te bikhīā mahi mahi rahai udāsu ||
satigura kī aisī vadiāi || putra kalatra vice gati pāi || 2 || (Dhanāsarī 4, GS. p. 661)

20 suine kei parabati guphā karī kai pāṅī pāīli || kai vici dharati kai ākāsī uradhi rahā siri bhārī ||
puru kari kāiā kaparu pahirā dhovā sadā kāri || bagā ratā pīalā kālā beda karī pukāra ||
hoi kucīlu rahā malu dhārī duramati mati vikāra || nā hau nā mai nā hau hovā nānaka sabadu vīcāri || 1 || (Vāra Mājha paūrī 1
saloku 1, GS. 139)

バラモンは命を取って沐浴する。

ヨーガ行者は方法を知らない盲。

3人とも破滅の道連れ²¹。

真正の宗教は、外面的な実践のなかに見つかるのではなく、愛情、信仰、憐憫、謙遜という内面の修養のなかに見つかるのである。

方法を見極める〔真正の〕ヨーガ行者は、正師の恩寵によって一者を知る。

〔世俗を〕遠ざける〔真正の〕カーズイーは、正師の恩寵によって生きつつも死ぬ。

ブラフマンを熟考する〔真正の〕バラモンは、自ら度し一族全員も度する²²。

憐憫をマスジッドに、信仰を礼拝用敷物に、正しい生き方をクラーンに〔せよ〕。

謙虚を割礼に、実直を断食に〔すれば〕、〔真正の〕ムサルマーンになる。

善行をカアバに、真実を導師に、慈愛を信条と礼拝に〔せよ〕。

数珠をかれ（神）が嘉するものに〔せよ〕、

ナーナク曰く、〔さすれば、かれは汝の〕名誉を守る²³。

バラモンよ、アンモナイトの化石（ヴィシュヌ神の象徴物）を拜んで祈願すればよ

い、善行をカミメボウキの実でできた数珠〔にすればよい〕。

ラーム（神）の名号を唱えて〔彼岸に至る〕筏を造れ、慈悲を垂れ給え、慈悲深き者よ〔と唱えて〕。

なぜ荒れ地に水をやるのか、人生を費やして。

焼いていない〔レンガの〕壁は崩れる〔のに〕、

何故〔壁を塗るための〕生石灰を持ってくるのだ²⁴。

4. 信愛

聖地〔巡礼〕、苦行、慈悲、布施。

21 kādī kūru boli malu khāi || barāhmaṇa nāvai jīā ghāi ||
jogī jugati na jāṇai andgu || tine ojāre kā bandhu || 2 || (Dhanāsarī 7, GS. p. 662)

22 so jogī jo jugati pachāṇai || gura parasādi eko jāṇai ||
kājī so jo ulaṭī karai || gura parasādi jīvatu marai ||
so barāhmaṇa jo barahmu bīcārai || āpi tarai sagale kula tārai || (Dhanāsarī 7, GS. p. 662)

23 mihara samīti siadaku musālā haku halālu kurāṇu ||
sarama sunnati sīlu rojā hohu musalamāṇu ||
karaṇī kābā sacu pīru kalamā karama nivāja ||
tabasī sā tīisu bhāvasī nānaka rakhai lāja || (Vāra Mājha saloku 1 paūrī 7, GS. pp.140-141)

24 sāla grāma bipa pūji manāvahu sukritu tulasī mālā ||
rāma nāmu japi beṛā bāndhahu daīā karahu daīālā || 1 || (Basanta Hiṇḍola 9, GS. p.1171)

それによって得られるものは、微塵の名誉。

聴聞し信仰して心の中で愛する者は。

〔身体〕内部の聖地で、罪垢を洗う²⁵。

聖地が身体内部にある。宗教は内面にあり、その基本的な表現は愛情であり、より正確に言えば信愛である。この無形相の神に対する信愛は、創造世界に遍満する神の存在を覚知した人に求められる緊要な対応なのであり、神との合一への希求がかれの中に覚醒するのである。まさにこの点において、グルー＝ナーナクはサントと観点を共有し、ヴィシユヌ派のバクティの観念に負っているのである。ナーナクの作品には、ヴィシユヌ派特有のバクティの観念の表現もあり、それはヴィシユヌ派では一般的に花婿を希求する花嫁の心情として表現されているものである。

信愛・愛情をもって真実在を崇める者、至高の憐愍を渴仰する者は。

落涙して懇願すれば、心に憐憫をもった悦び〔が得られる〕²⁶。

こうした基本的なバクティを強調していることに加えて、われわれはグルー＝ナーナクの作品の中により重要な付随する観念を見いだす。それは、神への畏敬の念であり、神の無限性と神の絶対的な権威の認識であるに違いない。

〔神への〕畏敬はとても重い大きな錘。

気まぐれな心は、口で話してしまえば、軽い。

〔神への畏敬を〕頭に載せていき、重荷に耐えよ。

慈眼者（神）の恩寵によって、正師を熟考せよ。

畏敬がなくば誰も苦海を越えられず。

畏敬を〔心に〕置けば、愛情が加わる²⁷。

神への完全な服従、信条への無条件の恭順の観念もあるに違いない。

主人は近くに〔いる〕、愚かな花嫁よ、外になぜ探す。

畏怖を〔目の縁に付ける油煙の〕付け軸にして目に当てて、愛情を装飾品とせよ。

25 tīrathu tapu daiā dattu dānu || je ko pāvai tila kā mānu ||
suñiā mañniā mani kītā bhāu || antaragati tīrathi mili nāu || (Japujī 2, GS. p. 4)

26 bhagati prema ārādhitam sacu piāsa parama hitam ||
bilālāpa bilala binantīā sukha bhāi cita hitam || 1 || (Gūjarī aṣṭa. 5, GS. p.505)

27 bhāu mucu bhārā vaḍā tolu || siri dhari calīai sahīai bhāru || nadarī karamī gura bīcāru || 1 ||
bhai binu koi na lañghasi pāri || bhai bhāu rākhīā bhāi savāri || 1 || rahāu || (Gaurī 1, GS. p. 151)

主人に愛情を抱く、幸せな花嫁と知られるようになるだろう。

行って聞くがよい、幸せな花嫁よ、彼女たちがどのように主人を得たのか。

〔主人が〕 することは何でも良いこととして受け入れよ、

〔自分の〕 賢さと意志を捨てるがよい。

〔主人の〕 愛情によって宝が得られる、その足に心を合わせよ。

主人が言うことをなせ、身体と心を〔主人に〕 与えよ、このような香水を身につけよ。

このようにして（聞いて）、幸せな花嫁は答える「姐さん、こうして主人が得られるのね」と²⁸。

こうして、神の讃歌の詠唱が続くのであろう。

〔神に〕 使える者は、栄誉を得る。

ナーナク〔曰く〕 歌い讃えよ、有徳の宝（神）を。

歌い聴け、心に愛情を抱け²⁹。

ナーナクは、こう熟考して言う。

〔神の〕 讃嘆〔によって神の〕 宮殿〔に居所〕を得る³⁰。

上記のすべては、伝統的なバクティの諸相であり、一方のヴィシヌ派の帰依者（bhagata < bhakta）と他方のグルー＝ナーナクとの間の重要な協調点を示している。しかしながら、もちろん両者には基本的な相違があるのである。第一に、グルー＝ナーナクの作品にはアヴァターラ思想の明らかな排除の観念がある³¹。グルー＝ナーナクはサントたちと同じように、至高で化身せず、何らかの顕現でも媒介でもない神そのものに対する帰依を表明しているのである。第二に、「名号の憶念」（nāma simarana）あるいは「名号の念誦

28 sahu neṛai dhana kamaliai bāharu kīā dhūḍhehi ||
bhai kīā dehi salāī nainī bhava karī sīgāro ||
tā sohāgaṇi jāñīai lāgi jā sahu dhare piāro ||

jāi puchahu sohāgaṇī vāhai kinī bātī sahu pāāi ||
jo kichu kare so bhalā kari māñīai hikamati hukamu cukāīai ||
jā kai premi pdārathu pāīai tāu caraṇī citu lāīai ||
sahu kahai so kījai tanu māno dījai aisā paramalu lāīai ||
eva kahahi sohāgaṇī bhainē jnī bātī sahu pāīai || 3 || (Talaṅga 4, GS. p. 722)

29 jinni seviā tini pāīā mānu ||
nānaka gāvīai guṇī nidhānu ||
gāvīai suñīai mani rākhīai bhāu || (Japujī 5, GS. p.2)

30 nānalku ākhai bīcāru ||
siphatī gaṇḍhu pavai darabāri || 2 || (Vāra mājha saloku 2, paūṛī 12, GS. p. 143)

31 [橋本, 2015 : 第2章第7節]

(nāma -japa) の解説の中に明言された、神への愛情の実際的な表現のグルー=ナーナクの理解がある。この解説は、根本的に重要である。まさに、それが彼の実践論の本質をなすものであり、そのなかに帰依者の適切な対応に対する彼の顕著な理解があるからである。

5. 「名号の憶念」

この世界は蒙昧に満ちあふれ、生死の多くの苦しみ [がある]。

正師の庇護のもとに行けば解脱できる、ハリ (神) の名号を心中で念誦して³²。

名号に専念して自己本位 [の心] はなくなる。

名号に専念して真実在 (神) に沈潜している。

名号に専念してヨーガの方法を熟考する。

名号に専念して解脱への門を得る。

名号に専念して三界を理解する。

ナーナク [曰く] 名号に専念して常楽を得る³³。

知性が罪によって汚れたら。

名号の愛情によって洗われる。

福德と罪悪は言葉ではない。

行為を何度も繰り返せば [その結果は靈魂に] 書き込まれる。

自分で植えた物を自分で食べる。

ナーナク [曰く、人は] 教令によって去来 (輪廻) する³⁴。

神の教令 (hukama) は、自業自得を強調する業思想のなかで説かれている。業果を消し去るには、輪廻転生をもたらす種ではなく、神との合一をもたらす種を植えなければならない。この種が、神の名号の愛情なのである。現代の教学者サーヒブ・スィング (Sāhib Singh, 1892 - 1977) は「ジャブジー」の詩節に次のような注釈を加えている。

マーヤー (迷妄) の影響の結果、人は邪悪となり心が汚れる。この汚れが純粋な神から人を離し靈魂が苦を味わう。「名号の憶念」のみが、人が即座に浄化される方法で

32 ihu jagu moha heta biāpitaṁ dukhu adhika janama maraṇaṁ ||
bhaju saraṇi satigura ūbarahi hari nāma rida ramaṇaṁ || (Gūjarī Aṣṭa. 5 (5), GS. p. 505)

33 name rate haūmai jāi || nāmi rate saci rahe samāi ||
nāmi rate joga jugati bīcāru || nāmi rate pāvahi mokha dūaru ||
nāmi rate tribhavaṇa sojhī hoi || nānaka nāmi rate sadā sukhu hoi || (Siddha Gosatī 32, GS. p. 941)

34 bharaī mati pāpā kei sāngi || ohu dhopai nāvai kai raṅgi ||
punnī pāpī ākhaṇu nāhi || kari kari karaṇa lokhi lai jāhu ||
āpe bījī āpe khāhu || nānaka hukamī āvahu jāhu || (Japujī 20, GS. p. 4)

あり、「憶念」の実践が心の悪を浄め、心を神と結ぶ方法なのである³⁵。

数学者であり文学者でもあるヴィール・スィング (Vīr Singh, 1872 - 1957) も同様な注釈をしている。

ここで正師がわれわれに、罪に汚れた心や知性に浄性を取り戻す方法は名号の愛情であると知らせているのである。〈中略〉神はとても清浄なるものである。神の名号の憶念が、われわれの心を神に対する瞑想へと至らしめるのである。このようにして、名号によって内官 (antahkarāṇa) が名号を持つもの (神) と交感するに至り、神の清浄さによって浄化されるのである。「名号の憶念」によって内官はほかの不浄な傾向から分離される。こうして「教令」とその授与者 (神) へと漸進して近づき、「自己本位」が取り除かれる³⁶。

しかし、人はどうして「名号を愛す」のか。「名号の憶念」あるいは「名号の念誦」という表現はグルー＝ナーナクの用法のなかで何を意味しているのか。

「名号」とは神の实在、神の属性の総体、神に係わる確定できる集合の顕現である。「名号」とともに使われる動詞は「念誦する」であり、繰り返して唱える意味である。しかしながら、グルー＝ナーナクの実践論では、機械的な念誦ではない。このことは次の「ジャプジー」の用例から窺えよう。

1枚の舌から10万枚の舌になり、10万枚の舌が200万枚の舌になれ。

〔その各々の舌で〕何十万回も唯一の世界主 (神の) 名号を唱えよ。

この道が主 (神) への階梯、昇っていけば〔神と〕冥合する³⁷。

しかし、このような用例は、彼の一般的な用法の脈略のなかで理解されなければならない。ここには誇張表現があり、神の威厳を伝えようとする例であり、単一の名号や音節の無限の反復が解脱への確約された道であるという主張ではない。グルー＝ナーナクは、グルー＝アマルダースの宣言と疑いなく一致した考え方を持っていた。

ラーム、ラームと唱えながら全世界が動き回るが、〔こうしても〕ラーム (神) は得

35 [Sāhib, 1962: 87]

36 [Vīr, 1958: 101]

37 ika dū jībhau lakha hohi lakha hovahi lakha visa ||
lakhu lakhu gerā ākhīahi eku nāmu jagadīsa ||
etu rāhi pati pāvīā carīai hoi ikīsa || (Japujī 32, GS. p. 7)

られない³⁸。

こうした単純な反復は十分ではないのである。たとえ復唱が熱のこもったものであれ、洗練された体系的なものであってもである。発声の内面化、発声する語意の理解と人の全存在をその最奥の意味にさらすことに対する最大の必要性が強調されたときに初めて、選択した語彙や短句の反復詠唱が意味をなすのである。

「念誦」との関わりで、グルー＝ナーナクは「憶念」について次のように述べている。

〔人は〕真正のムラーリ（神）〔の名号〕を念誦する、〔その神が人の〕心に住む時³⁹。

そして、神を心に住まわせる方法が、正師のことに顕現する神の属性に対する瞑想なのである。

美しい言葉によってハリ（神）が得られる、正師のことに沈思瞑想して⁴⁰。

ことに熟考して生死の海を渡る⁴¹。

〔生死の海に〕沈み家も滅ぼした、正師の愛情に赴け。

真実の名号を瞑想し、〔神の〕宮殿で平安を得よ。

ハリ（神）の名号を瞑想すれば楽が得られる、実家（此界）に居るのは数日ばかり。

自分（本来）の家に住めば真実が得られ、愛しき人と毎日〔居られる〕⁴²。

プージャー（礼拝供養）せよ名号を念想して、

名号なくば〔真正の〕プージャーなし⁴³。

神の本性と属性に対する瞑想は、グルー＝ナーナクの修道論の核をなすものである。ことに神の絶対性を顕現する。ことに神の永続性を明らかにする。これを念想し、無常な此界を遠離する。ことに神の偉大さを明

38 rāmu rāmu karatā sabhu jagu phirai rāmu na pāiā jāi || (Vāra Bihāgarā, saloku 1 pauṛī 18, GS. p. 555)

39 sēcā murāre tāmi jāpahi jāmi māni vasāvahi || (Vaḍahaṃsu chanta 2 (5), GS. p. 567)

40 rūṛī bānī hari pāiā gura sabadi bīcāri || (Oankāru 47, GS. pp. 936-7)

41 sabadu vīcāri bhāu sāgaru tarai || 1 || rahāu || (Prabhāti Asaṭa. 1, GS. p. 1342)

42 būṛī gharu ghālio gura kai bhāi calo ||

sēcā nāmu dhiāi pāvahi sukhi mahalo ||

hari bāmu dhiāe tā sukhu pā e anadinu nāli piāre || (Dhanāsari chanta 3 (2), GS. p. 689)

43 pūjā kīcai nāmu dhiātai binu nāvai puja na hoi || 1 || rahāu || (Gūjarī 1, GS. p. 489)

らかにする。これを内省し神の前で謙虚になる。瞑想は、神の名号の本性に則した言葉や行為に満ちあふれていなければならない。

これが、帰依者に求まられている実践的な対応なのである。帰依と瞑想の対象である神への愛情を念想し育み神に至ることである。この修道論が、グルー＝ナーナクの後継者とその帰依者が爾来発展させ解釈し拡大してきたものである。このことは、後代のグルたちの作品から抽出される思想を分析する際に念頭に置いておくべきことであろうし、聖典の中に見つかることに基づく想定を表しているのである。このことは、想定が基本のものとは一致していないということを言っているのではなく、グルー＝ナーナクの作品に表された基本が比較的単純な事柄であり、それが後代に修道論になったということだけを言おうとしているのである。さらに、グルーたちの弟子たちの場合、ことばの源泉と瞑想の基本的な方法は、当然ながら、『アーディ・グラント』所収の作品であった。

この瞑想は個人的なものでなければならず、同時に協働的な応用面を持っていなければならない。グルー＝ナーナク、これら両面を強調している。

甘露の時刻（夜明け前）に、真正の名号の偉大さを念想せよ⁴⁴。

善き人との交わりでハリ（神）の愉悦を得て正師に会えば、死神の恐れは失せる。

ナーナク〔曰く〕正師の教えにしたがってラーム（神）の名号を念誦すれば、

ハリ（神）が得られる、〔これが〕額に書かれた（生来の）運命⁴⁵。

真正の善き人（帰依者）たちとの交わり（satasāṅga）が開悟への重要な乗り物であるという観念を、カビールが大変強調しているが、グルー＝ナーナクの作品でも同様に強調されている。

〔人が〕何十万もの知恵を持ち、何十万もの人と愛着をもって会おうとも。

善き人との交わりがなければ〔人は〕満足せず、名号なくて苦しみと苦悩ばかり⁴⁶。

〔神は〕個我の内部に潜み〔世界を〕生み観ている、

正師のことばにしたがってサント（聖者）たちに〔神は〕顕れる⁴⁷。

44 anmrita velā sacu nāu vadiāi vīcāru || (Japujī 4, GS. p. 4)

45 sādhasaṅgati mahi hari rasu pāīai guri miliāi jama bhāu bhāgā || nānaka rāma nāmu japi guraukhi hari pāe mmasataki bhāgā || 5 || (Soraṭhi 10, GS. p. 598)

46 lakha siāṅapa je karī lakha siu pīṭi milāpu || binu saṅgati sādha na dhrāpīā binu nāvai dūkha saṁtāpa || (Sirī rāgu 17, GS. p. 20)

47 ghti ghati gupatu upāe vekhai paragaṭu guramukhi santa janā || (Basanta hindola 12, GS. p. 1172)

白檀の木の伝統的な比喩も使われている。

〔真正の〕帰依者の栄光は白檀のよう、すべてに芳香を放つ⁴⁸。

「善き人たちとの交わり」における帰依者の活動は、ことばの瞑想よりも讃歌の詠唱である。しかし、「名号の念想」は、神と帰依者の神への到達に係わる両方の事柄を含んでいる。音楽が常に使われていた。吟遊詩人のマルダーナーは少なくともグルー＝ナーナクの旅に随行していた。このように讃歌詠唱が毎日実践されていたであろう。

苦は毒、ハリ（神）の名号が薬。

満足〔を与える〕の石臼で〔それを〕挽け、布施の播り粉木で。

〔それを〕毎日摂れ、身体は弱らない。

最期に死神を打ち倒せる。

このような薬を摂れ、愚か者よ。

それを摂れば、汝の悪性がなくなる⁴⁹。

名号の瞑想と讃歌詠唱は多くの人に容易にうつったに違いないが、グルー＝ナーナクは彼らに反対のことを説いた。それらは困難であり、それらが要求する犠牲は誰も用意できない。しかし、それを受け入れる者は、犠牲よりもはるかに重い報酬を得られると。

〔名号を〕唱えれば生き、忘れれば死ぬ。

唱えるのは難しい、真実の名号を。

真実の名号への渴仰が生じれば。

その渴仰によって〔人は〕食し苦が遠ざかる⁵⁰。

次が字義通りの修道論である。人間の身体は神の名号が得られるべき福田である。それを神への愛情、謙遜、畏怖と正しい生活、清浄、忍耐をもって耕せば、その報いを得られるのである。

心を鋤にして、農業を生業とし、謙遜を遣水にして身体を畑〔と想え〕。

48 candana bhagatā joti inehī sarabe paramalu karaṇā || (Tilāṅga 2, GS. p. 721)

49 dukha mahurā māraṇa hari nāmu || silā santokha pīṣaṇu hathi dānu ||

nita nita lehu na chījai deha || anta kāli jamu mārāi theha ||

aisā dāru khāhi gavāra || jitu khādhai tere jāhi vikāra || 1 || rahāu || (Malāra 8, GS. pp. 1256-7)

50 ākhā jīvā visarai mari jāu || ākhṇi aūkhā sācā nāu ||

sāce nāma kī lāgai bhūkha || titu bhūkhai khāi calāhi dūkha || 1 || (Āsā 3, GS. p. 349)

〔神の〕名号を種として、満足を馬鋤にし、清貧を衣服〔と想え〕。

愛情をもって仕事をすれば、〔種が〕芽吹き、家が豊かなのを見るだろう⁵¹。

畏怖が土壤、清浄が遣水、真実と満足が牛。

鋤が謙遜、耕作者が心、記憶が湿った土、〔播種の〕時が〔神との〕合一。

名号が種、雅量が稔り、〔しかし〕世間はすべて偽り。

ナーナク〔曰く、神が〕慈眼を向けてくれれば、すべての別離はなくなる⁵²。

6. 付随する結果

瞑想として発展していく経験に至る「名号の憶念」は徐々に人を神に近づけ、心が神に最終的に冥合することで完全な完成態となる。それらは同時に修道方法とその必要な補助の結果である。なぜならば、それらは「名号」の本性をさらに明らかにし、人をより高いレベルに昇ることを可能にするからである。

このように、*visamādu* (Skt. *vismaya* 「驚愕」) の経験は「名号の憶念」の結果であり、同時により高いレベルの瞑想への刺激でもある。*visamādu* は神の筆舌尽くしがたい圧倒的な偉大さによって引き起こされる非常に強い畏怖の感覚であるかもしれない。あるいは、神の偉大さによる畏怖を引き起こすヴィジョンの結果起こる実際の恍惚状態を意味しているかもしれない。グルー＝ナーナクの作品の中で、この言葉が頻出する詩節は、*visamādu nāda vismādu veda* で始まる *Āsā dī Vāra* の *saloku* (Skt. *śloka*) であり、一つおきに *visamādu*⁵³が出てくる。Japujī 24も同じ畏怖の念を表現している。

〔神の〕称賛に終りなく、〔それを〕説くこと（方法）に終りなし。

〔神の〕行為に終りなく、〔神の〕賜物に終りなし。

〔神の〕姿は終わりなく、御声も終りなし。

〔神の〕際限は計れず、心にどんな秘密〔があるや〕。

〔神の〕際限は計れず、どんな形相〔か〕。

〔神の〕際限は計れず、〔どんな〕境界〔か〕。

〔神の〕際限を知ろうとするも、多く〔の人〕が〔失敗して〕泣くばかり。

その際限は獲得できない。

51 manu hālī kirasānī karaṇī saramu pāṇī tanu khetu ||
nāmu bīju santokhu suhāgā rakhu garībī vesu ||
bhāu karama kari jamasī se bhāgatha dekhū || 1 || (Sorathī 2, GS. p. 595)

52 bhāū bhui pavitu pāṇī satu santokhu bakeda ||
halū halemī hālī citu cettā vatra vakhata sañjogu ||
nāu bīju bakhasīsa bohala dunīā sagala daroga ||
nānaka nadarī karamu hoi jāvahi sagala vijoga || (Vāra rāmakaḷī saloku 2 paūrī 17, GS. p. 995)

53 Vāra āsā saloku 1 paūrī 3, GS. pp. 463-4.

この際限は誰も知らない。
多くを語っても、多くが〔語られず〕残る。
偉大なるは主（神）は、高い場所〔にいる〕。
高みの高み、〔その〕上に〔神の〕名号。
〔神と同じように〕偉大で高みにある者が。
神の高みを知る者なり。
自ずから偉大である者（神）が、自分自身を知る。
ナーナク〔曰く〕慈眼者（神）の行為は恵みを与える⁵⁴。

これが、visamādu である。グルー＝ナーナクにとって、真正の瞑想とより洗練され熱心な瞑想の必然的な結果であるからである。

自己本位 (haumai) とそれに関係する衝動の排除は、ある結果とその本質的な助力の両方のようなものである。「名号」の念想を帰依者が信じれば信じるほど、自己本位に従うことはより少なくなる。自己本位に従わないほどに、帰依者は究極の冥合という目標に進んでいく。この過程は、カピールと同じように⁵⁵、自己を捨てるという意味で表現されている。二種類の死が、グルー＝ナーナクの考え方に表れているが⁵⁶、これは第三のものである。

眼が悪くなり、〔神への〕畏怖も愛情もない。
自我を滅すれば、〔神の〕名号を得る。
ことばによって死ねば、再び死なない。
〔このような〕死がなくば、〔人は〕どうして完全な者となろう⁵⁷。

これが、心 (mana) の捨離によって遂げられる死である。すなわち真正の帰依者が生前に遂げられる自我の死である。心は残るのであるが、悪行の中に表現される自我の意識がある心はそうではない。帰依者の名号に対する愛情と瞑想を通してなされるのが、この方

54 antu na siphatī kahaṇi na antu || antu na karaṇai deṇi na antu ||
antu na vekhaṇi suṇaṇi na antu || antu na jāpai kiā mani mantu ||
antu na jāpai kītā ākāru || antu na jāpai pārāvāru ||
anta kāraṇi kete bilalāhi || tā ke anta na pāe jāhi ||
ehu antu na jāṇai koi || bahutā kahīai bahutā hoi || (Japujī 24, GS. p. 5)
vaḍā sāhibu ūcā thāu || ūce upari ūcā nāu ||
evaḍu ūcā hovai koi || tisu ūce kaū jāṇai soi ||
jevaḍu āpi jāṇai āpi āpi || (Japujī 24, GS. p. 5)

55 [橋本, 2015b: 第2節5]

56 Sorathī 6, GS. p. 655.

57 disaṭi vikārī nāhi bhāu bhāu || āpu māre tā pāe nāu ||
sabadi marai phiri maraṇu na hoi || binu mūe kiu pūrā hoi || (Gaurī 7, GS. p. 153)

向を変えた心であるに違いない。

心を殺せば、生きながらにして死を知る。

ナーナク〔曰く〕、慈眼によって慈眼者を知る⁵⁸。

正師の恩寵によって〔人は〕自らを知り、生きているうちに死ぬ⁵⁹。

7. おわりに

上記2. においてあらかじめ提示したように、グルー＝ナーナクの修道論は極めて内面的な性格の強いものであったことが、GS. の彼の言説の中から読み取ることができた。

この謂わば「内面の宗教」の側面は、カビールを嚆矢とする中世北インドに輩出したサントたちと共有するものであることを再確認し、また近代的な宗教的倫理観にとっても適っていることを確認しておきたい。

【参考文献】

- 拙稿 (2006) 「第2部 スイク教祖ナーナクの思想」『インド中世民衆思想の研究』、ノンブル社、459-490頁
- (2013) 「シイク教研究一序」『東洋学論叢』第38号、117-136頁
- (2014) 「シイク教聖典編纂者グル＝アルジャンの生涯—歴史と伝承のなかで」『東洋思想文化』、第1号、86-103頁
- (2015a) 「シイク教祖ナーナクの神観念」『東洋文化思想』第2号 (20)-(43) 頁
- (2015b) 「インド中世民衆思想における死生観—シイク教祖ナーナクの場合—」『東洋学研究』第52号、247-259頁
- (2018) 「グルー＝ナーナクの思想における『神の自己顕現』の観念」『東洋学研究』第55号、79-97頁
- Cole, W. Owen & Piara Singh Sambhi (1978) *The Sikhs: Their Religious Beliefs and Practices*, London: Routledge & Kegan Paul. (溝上富夫訳『シイク教—歴史と教義』筑摩書房、1986年)
- do. (1990) *A Popular Dictionary of Sikhism*, London: Curzon Press.
- Callewaert, Vinand, M. (1996) *Gurū Granth Sāhib with Complete Index*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- この他、Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee 刊行のグルムキー文字版、デーヴァナーガリー文字版、および <http://www.gurbanifiles.org/> 上のテキストと辞典。
- McLeod, W.H. (1990) *Textual Sources for the Study of Sikhism*, Chicago: University of Chicago Press.
- do. (1995) *Historical Dictionary of Sikhism*, London: Scarecrow Press, 1995.
- do. (2000) *Sikhs and Sikhism*, New Delhi: Oxford University Press, 2000.
- Vir Singh (2007) *Santhiā Srī Gurū Granthā Sāhiba Jī*, Vol.1, (1st ed. 1958), New Delhi.
- Sāhib Singh (1962), *Srī Srī Gurū Granthā Sāhiba Darpaṇa*, Paṭiyālā.

キーワード：インド、シイク教、『グルー・グラント・サーヒブ』、グルー＝ナーナク、実践論

58 manu māre jīvata mari jānu || nānaka nadarī nadari pachānu || (Prabhāti asta. 3 (8), GS. p. 1343)

59 gura parasādī āpo cīnhai jīvatiā iva marīai || (Oankāru 41, GS. p. 935)